

## 出る？出ない？江戸行きをめぐる

### 語りの世界 (その2)

—下水内郡栄村調査報告4—

## To go, or not to go—Edoiki:a Sakae-mura category of migration(2)

中村博一\*

Hirokazu Nakamura

### 江戸行きの記事

江戸行きという都会での若者の季節的出稼ぎが盛んに行われていた時代の記録は極めて少ない。栄村史に掲載された青年学校の生徒数の季節的増減はその貴重な例といえよう。そこには小学校を終えた(アガッタ)昭和10年代の若者達の生活の一端が現れている。年次によってばらつきが見られるが、冬季の生徒数が激減するのは鮮明に読み取れる。わざわざ冬の生徒数まで併記したこの資料を村史に記載した理由を書き手は示していないが、記録を作成した側の生徒数の極端な減少への関心が、この資料にはうかがえるのである(表1)<sup>1)</sup>。

### 出た者、出ない者の江戸行き

もちろん、学校をアガッタすべての若者が冬季都会へ稼ぎに出たのではなかった。農林学校や旧制中学へ進学した者は例えば、本稿で述べるような出稼ぎの経験はそれほどもってはいない。農林学校卒業後教員として実家から離れ転勤を繰り返した男性(大正14年生)は自分の人生を通年出稼ぎだと表現するが、これは転勤の多い教員という仕事の特徴を述べたのであり江戸行きと同列には論じられないだろう。また、進学しなくとも都会へ出ない若者もいたことを忘れるべきではない。

そうした人々とのインタビューではかすかな誇らしさのようなものが語り手から感じとれることが幾度かあった。江戸行きと経済的余裕の関係性を話者自身が認識していたためではないかと思われる。

以下では江戸行きに出なかった若者の語りをも手がかりに含め、具体的に取り出される理由や価値観から、江戸行きの条件や特性を具体的に検討してみたい。なぜなら江戸行きという習慣は、出た者の語りのみから文化的に構成された習慣と描写するだけでは十分ではないからであり、出なかった者の語りの中にも同様な江戸行き観が見いだせるやもしれないからである。文化の習得や文化化の過程に注目する Strauss は「社会行為とは、公的な出来事が私的な表象に転換し、演じられ、そして新たな公的な出来事を生み出す過程の結果なのだ [Strauss1992:16]」と述べている。個々の「私的な表象」として出た者の江戸行きのみならず、いかなかった者の江戸行きをも「公的な出来事」としての江戸行きにつなげる作業は、再生産される江戸行きのダイナミズムを見ようとする目には不可欠だと思われる。そしてそれは江戸行きに限らず他の出稼ぎを取り巻く労働観やジェンダー観へと広がっていくかもしれない [レヴィ=ストロース1979参照]。

\*非常勤講師

表1 (旧塚村) 塚青年学校一覧表 (栄村1964:761-2より)

年次	普通科生徒数		本科生徒数					研究科 生徒数	生徒数 計	
	1年	2年	1年	2年	3年	4年	5年			
昭和 10年	男	10	12	37	19	18	29	24	14	163
	女	14	9	26	18	—	—	—	5	72
10年冬	男	7	9	25	9	3	4	—	7	61
	女	11	5	7	2	—	—	—	—	25
11年	男	19	10	30	37	19	18	29	24	186
	女	16	14	20	26	—	—	—	—	94
11年冬	男	12	5	12	10					39
	女	14	5	5	3					27
12年	男	12	12	26	25	32	20	13	25	165
	女	9	10	18	16					53
12年冬	男	12	10	13	11					46
	女	11	16	14	3				8	52
13年	男	8	11	36	23	21	28	19	16	162
	女	11	9	26	23					81
13年冬	男	7	9	12	4	3	6	2	—	43
	女	2	6	15	11				8	42
14年	男	12	6	28	29	18	20	29	15	157
	女	8	3	21	24				19	75
14年冬	男	12	6	12	14	8	9	6	—	67
	女	8	3	15	12				5	43
15年	男	2	4	23	26	28	21	22	19	144
	女	5	7	—	13	16	16	—	18	75
15年冬	男	14	6	22	10	11	6	10	7	86
	女	6	4	7	2	5	2	3	5	34
16年	男			30	19	25	25	16	18	133
	女	8	4	26	9	12				72
16年冬	男	1	2	28	14	11	13	9	8	86
	女	5	2	22	8	6	—	—	6	49
17年	男			30	23	25	25	16	15	134
	女	2	2	24	28	20			8	80
17年冬	男			31	24	24	11	9	12	111
	女	2	2	19	12	9	—	—	9	53
18年	男	1		33	25	19	22	20	10	130
	女	6	10	29	19	8	—	—	4	76
18年冬	男	1		31	24		—	—	2	58
	女	3	7	23	15	3	—	—	—	51

## アニ（長男）にとっての出稼ぎ

現在むらで話を聞ける男性の多くはアニである。移動をテーマとしてむらと外部との関係を考察する場合、前山が注目したようにオジ（弟）に目を向けることは非常に重要であろう[前山1981]が、本稿の対象となる人々はアニもまた江戸行きに出た者が多く、ここでは、特にアニ達の文脈について検討してみたい。まずは出なかった者の例を取り上げる。

事例a：ヨウジさん(大正9年生男)は東京へいきたくていけなかった話者である。「おら出稼ぎしたこたない、家庭がほれ」「(その場にいた60代女性)：一人っ子なんだもん」「ひとりだすから、親たちが早く亡くなったから」「テがないから出たくても出られなかったんだ」「だからタニンノメシというの全然食べたことない」「一度もいったことないから一度はいつかみたいと思ったんだがとうとうだめだった」。コリを背負って真っ白になって帰郷する同年代のイドガエリ(江戸帰り)の若者を見てうらやましく思った。でもユキホリ(除雪)をしなければならなかった。ヨウジさんの語りには経済的な事情はまったく含まれない。いきたいという欲求をもちながら一人っ子で人手(テ・テマ)が足りないためいけなかった。冬季の人手がなくて出なかったとする説明は最も多い。

事例b：ヨシキさん(大正11年生男)は一人っ子ではないが、女子が2人産まれて「もうできない」と思った家庭にできた男子として大事に育てられた。江戸行きの経験はまったくない。「全然おれは、まあ、体も弱かったらうし、山へ入って(カネトリは)炭焼きを少しした程度」である。しかし、ヨシキさんは東京見物に出かけている。ヨシキさんの「東京見物は召集(昭和19年)をくったから」「見納めに、どうせ軍隊ではもう命ねえんだから、自分は東京というところ一回見しておきたいと、親はすっからかんだったんだでも、なんだかんだくどいて、東京へ1ヶ月見て歩いたなあ」。この東京見物は、徴兵検査前の多数の若者の江戸行きと対応する行為と考えられる。

「せがれの言う希望には何を曲げてともという」親から「大事にしてた10円札もらって」出かけた。ヨシキさんが働きに出なかったのは直接的には体が弱かったという理由だが、あきらめていたのにできたアニとして大事に育てられたことから親が働きに出したくなかった旨がうかがえる。

事例c：タツオさんは大正12年生まれのやはりアニで、農林学校を卒業し教師になったオジがいる。江戸行きの経験はない。子供の頃から成績は優秀で小学校の恩師が中学への進学をすべて準備してくれるほどであったが、アニには学問は必要ないと親は進学を許さなかった。高等小学校をアガッテから兵隊へ行くまでの冬季間は青年学校へ通った。当時の青年学校はタツオさんの生活の重要な場であり、現在でも青年学校の手帳を大切に保存している。青年学校時代の自分は「はりきっていたほう」ではないかという。「自分は声が高く怖いようだったと今も言われる」。旧村の青年学校を代表して昭和16年「天皇陛下の御親臨」に参加した。そのため軍隊でも「お前が今度来たタツオ君か」と一目置かれた。タツオさんは東京へ働きにいきたくていけなかったのではない。親は「あんまり賛成はしないほうだったかもわからない」が、「出るとも言わないし出るなてんでもないけどね」。自分自身もまた「出稼ぎに出る気にもならなかった」。

都会への憧れは「なかった」と答えるタツオさんは、江戸行きに出た若者とむらにとどまった自分自身をあきらかに違う種類の人間と見ている。この例をもとに少々詳しく検討してみたい。江戸行きは基本的に一家の経済状態と結びついた習慣だとタツオさんは考えている。「フエウチの口稼ぎを兼ねて出稼ぎしたんも結構あったんだもん、口稼ぎ、悪い話(表現)だけども正直のどこ。ほいで若い者にすればそれほどお金をもってこねってよかった、とれなかった(稼げなかった)といえは仕方ないし、うまいもの食べてきただけでもトクっていうことだから」。タツオさん自身は稼がなくてもいい家に育った。冬むらに残ったのはタツオ家の経済状態を含めた状況とそれと結びついたタツオさん自身の選択によるとする。「両

親は自分が学校をアガッタ頃あまり丈夫じゃなかったんですよ、だからできればうちへいてユキホリしたり百姓したりしていればよかったんだ。両親の身体が弱く事例aのヨウジさん同様、人手がない家庭の事情と「そもこうもしていられたというかやっていたら」タツオ家の相対的に余裕のある経済状況のため出なかったのだという。タツオさんの語る江戸行きは経済的に余裕のない家から若者が口稼ぎに都会へ働きに出る習慣であり、自分は「甘えたんだかなんかだか知らないけど」出ようとは思わなかったという。ヨウジさんとは異なる点である。

タツオさんの例だけではなく「生活資金が必要で出かけたんぞ」「皆無とは言わないでも楽しみでいったなんてことはまずあり得ない（昭和5年生男）」など、江戸行きについても現代的出稼ぎ観とそれほど違わない経済的性格のみに限った観方は多く、勉強や修行といった意味の広がりを持たしがることすら慎むべきだとする態度の話者もいる<sup>2)</sup>。しかし興味深いことにタツオさんの語る江戸行きは以下のように経済的要因と深く関連するも人生の文脈に置きなおされ、タツオさん自身との関係でとらえかえされている。しかも経済的に豊かな方が幸せで、望ましいといった単純な命題にはならない。

タツオさんによれば、むらの生活に困って都会へ出る、出ないの選択はその後の人生の相違につながっているという。タツオさんは同集落の同年の親友ヤスシさん（大正12年生故人）との相違を語る。自分とは「はっきりと性格が異なり」都会へ「憧れる人は憧れたんね、ヤスシさんなんか早く出たかったもん」。仲がよかったので互いに悪口を言い合ったという。「ヤスシさんの言うことにお前はおれより田がちょっとよけいにあったばっかりにうちにしがみついていねならなかったから偉くなれねんだなんて言われた」。ヤスシさんは「田んぼの少ないのにキョウダイは大勢あったし、あの人は特に才知のまわるほうだった」。ヤスシさんは事業を行い、キョウダイも成功し財産を残しているという。一方、自分自身の人生を語る際はタツオさんは「運が悪いというか」と形容する。進学しなかったけれども、アニゆえに親から許されなかった状況に対する思いや、むらでま

じめに生活を続けてきたにもかかわらずそれほど成功もできなかった思いが、この表現には込められており、ヤスシさんの悪口は「悪口は悪口だが本当はその通りなんだ」と認めている。はじめからお互いが違うのだと認識しあっていたためヤスシさんから東京へ誘われることもなかったという。

上述のようにタツオさんの語りでは江戸行きの背景にはその家の経済的困窮があり、それは子供の育て方やその後の人生に大きな影響を与えたとする。前回も述べたが江戸行きの理由としてタニンノメンを食う意義をあげる話者は実に多い〔中村1997〕。彼らはそうしないと「だめになる」と親から叱られ、しかもその小言の裏側にクチペランというもう一つの江戸行きを自覚していた。タツオさんは経済的困窮が成功する人間を生み出すのだという。「だからあべこべにね、困ったうちから出た子供はみんな成功しているんすよ・・・事実子供も自然とそういう育て方になったというかな、うちの子供はいつになってもうちの者には甘えるし、ヤスシさんなんかキョウダイなんかみんな金残してそれこそ」。東京で働かなくてよかったタツオさん自身と東京で働かなければならなかったヤスシさんの相違は、その後の人生の相違として皮肉めいて語られている。そこでは口稼ぎ・クチペランとしての江戸行きの経済的性格とタニンノメンを食う修行としての江戸行きのモラルが2人の人生の比較の語りにおいて整合しているのである。つまり口稼ぎとタニンノメンを食う意義はホンネ対タテマエという表層に見える関係を越えて江戸行きという意味場の一部を矛盾なく構成すると考えるべきであろう。このように江戸行きの経験のない話者によっても同じ江戸行きが語られることこそが江戸行きの実践についての共有世界の存在を予感させるのである。

ところでヤスシさんとともにタニンノメンを食った同集落の若者もいる。ヤスシさんから誘われ浅草の海苔屋で一冬働いたスミオさんの語りを取り上げておこう。スミオさんは大正9年生まれのアニであり、3歳年下のヤスシさんを江戸逃げをした一人と記憶する。「(炭焼きをしていた)山から早く来てどっか行って来ると言ったところが、森(駅のある地名)の汽車に乗ったというんだ

な」「ヤスシさん（が）どうにも来てみる、来てみねか」「そういう手紙をもらってさ」「おれはその時おふくろがなかったもんでさ、キョウダイやバアチャンが反対したんさ、アニがそっけに出るこたねえてんで、オヤジは頑固なこと言うには冬場うちいたって仕事あるわけじゃねんだからタニンノメンをちった食ってみると、許可を得てさ、いっていやだったら銭使わないで来てんで帰りの旅費までくれた。（東京に）居着かれちゃこまるてんでアニだから」。秋始末を終えて11月の半ばに出て3月半ばに帰郷した。その後むらでは発電所の工事がはじまり、母親がいないことや祖母の反対があり「どっかへ勤めへなんて出るわけにはいかね」スミオさんは昭和16年に入営するまでの2、3年間電気会社の資材を運んだり、隧道を掘ったりしてむらで過ごした。「それっきりだなあ、タニンノメンを食ったというのは」。入営後の軍隊の生活がタニンノメンを食うこととして語られないのは興味深い<sup>3)</sup>。

スミオさんの話の中で重要なのはヤスシさんとの海苔屋での4ヶ月が、帰りの旅費まで親からもらってタニンノメンを食うという修行や勉強の意味合いで語られることである。ただし、唯一の都会での出稼ぎであるこの4ヶ月は、その後青年学校の指導員になるスミオさんの人生に影響する経験として語りの中では広がっていかないのだ。この点はタツオさんの語りとは対照的であり、出ることの経済的な性格づけもまたなされない。

スミオさんと同年（大正9年生）でやはり同集落のマサキさんはアニであり、東京へ逃げ出したことがある。その理由は祖父母がかわいがって出さなかったからであり、「アニがそっけに出るこたねえ」と祖母らに反対されたスミオさんの話と共通するところがある。スミオさんは父親からタニンノメンを食ってみると許可を得て出たが、マサキさんは1回目は逃げ、「やらねえとまた逃げてく」と言ったら許可をもらえた。「遊びにいったんだから」とはっきり言うマサキさんは、「アマッコがいばっている」料理屋を「こんつら馬鹿なとこにいられるか」とすぐやめ、紙屑を集めて製紙工場へ運搬する仕事を「服が汚れる仕事で、こんな仕事はだめだと出てっちゃって」、魚はきらいだったが築地のタコ屋へ落ち着いた。午前中

で仕事が終わるので大福やカレーライスを食べたり、スイス製の時計を買ったりした。「どうせもうかりゃしないだすけこれでおろせなんて」家から貯金通帳をもたされていた。マサキさんの語りにはタニンノメンを食うという表現はなく、遊びという言葉が何度も使われる。「徴兵検査前に1、2回ぐらいはきっと出た人が多いようだけど、それは遊びかたがたいたんだから」「遊びたいという考えがあったからね、映画のひとつも見たいとかそういうことでほとんど出たんだわ」。マサキさんの語りからは徴兵検査前の猶予期間のニュアンスがうかがえるのであり、その後の人生には影響しないその場限りの楽しい思い出という印象が聞き手には強い。マサキさんにとり重要な稼ぎとはむしろ販売の効率化を試みたむらでの炭焼きや伐採の仕事であった。しかし、経済的理由で都会へ出た者があったことをマサキさんははっきり区別している。「なかにはね、何がなんでもお金もって来なきゃ」ならない場合があった。

タニンノメンを食ってみると言われたスミオさんの語りも遊びに出たと言うマサキさんの語りも、徴兵検査やイェフトル前にある種の猶予を与えられた中で出稼ぎをしたのだとわたしには聞こえるのであり、事例bのヨシキさんの東京見物と同じく、比較的余裕のある家の大切なアニの経験として経済的性格をあまりともなわない出稼ぎと考えられ、タツオさんの語る出稼ぎとは対照的であるといえよう（それゆえに「違う種類の間人だ」との語りの特徴が際立つのだが）。このように年代的にはほぼ同じでしかも同じ集落で育った話者であっても江戸行きの意味づけは必ずしもつながらない<sup>4)</sup>。年代を多少さかのぼったとしても（明治末から大正はじめに生まれた話者でも）こうした意味づけのずれは見られる。したがって従来指摘されてきた通過儀礼としての江戸行き固有の価値が存在するというよりも、むしろ江戸行きという出稼ぎの習慣に各人、各家ごとの文脈がその時々で読み込まれていると考えた方がよい。私的に表象されるのだと言ってもよい。そうした文脈の中で大きなもの・共通するものを取りあげるとするなら、口稼ぎやクチペラシという経済的側面が第一に語られる江戸行きと、勉強・修行や観光・遊びとして経済的側面があまり語られない江戸行き

に区別できよう。話者によってこれらの文脈は重なり合い、またどちらかが相対的・絶対的に重みをもって語られることもある。

### 女性にとっての出稼ぎ

前節では男性、特にアニメの価値・意味づけを取り上げてみたが、次に女性の都会での稼ぎに注目してみたい。語りの中で男女の相違がはっきりと現れる場合があるからだ。例えば太平洋戦争の頃に小学校を卒業した男性は次第に都会で働かなくなる。戦争によって薪炭や伐採事業が推進され、山での仕事が多くなったことも関連していよう。

事例d：キミオさん（昭和2年生男）は9人キョウダイの末子だったが、高等小学校をアガッタ（昭和17年3月卒業）後も出稼ぎへは出なかった。年長のキョウダイが病氣や戦争で亡くなり、「オヤジは年をとったりして」いたので、「うちへいて夏冬と山仕事を」して稼いだ。雪で山に入れない期間は青年学校へ通い、2月12日<sup>5)</sup>が過ぎると飯場へ出た。家では人手がなく屋根の雪落としや小学校までの道ツケをしなければならなかった。兄姉も都会へ稼ぎに出だし、父親も東京で人力車夫や蕎麦屋をしたことがある。が、自分が出なかった。「いきてえとは思わなかったな、出たこたねえから」。近隣に住む3名の同級生達（男性）も「(山の)仕事をはじめから」出なかったという<sup>6)</sup>。

ところが「女はほとんどいなかったなあ」とキミオさんが語るとおり、同年代の女性達は終戦をはさんで紡績工場や奉公や軍需工場へと冬季間出かけている。冬の生活は男性とは異なったように見える。その多くは村役場や募集人の紹介、あるいはセンに（先に）働いていた人にカタッテ（頼んで）働きにいった<sup>7)</sup>。戦時下で労働需要があったことがうかがえる。「徴用よりも多少自由に働けるだけのことだった（大正12年生男）」という話者もいる。とはいえ「徹底的にいけいけてんで（大正14年生女）」という役場からの指示とは裏腹に、国のための勤労働員というよりも、ほとんどすべての話者が冬稼ぎとして当時の労働を回顧する。風船爆弾を作ったり、防毒面を作ったり、落下傘の修繕に携わった話者も同様である<sup>8)</sup>。カ

ネトリやクチペランとともに、都会を見たかったと語る話者がいる。むらを越えた時代的狀況にまるで影響を受けないかのように以前の江戸行きと同じ世界を生きた人々もいるようである。

この男女差は先の青年学校の生徒数増減にもはっきりと現れている。昭和17年次の旧堺村青年学校本科ではキミオさんと同年の1年生は女性24名男性30名だが、冬季は女性19名男性31名となっている。さらに2年生では女性28名男性は23名のところ、冬季は女性12名男性24名と冬季の女生徒の減少が目立つ。なお夏場でも生徒の男女比が極端にアンバランスなのは中京阪神地方の紡績工場へ冬だけではなく、通年も出て働く女性達が出たためと思われる。この辺りにも女性の出稼ぎの特徴が現れているといえる。

では女性達にとって働きにいく、いかないとはどう語られるのか。さらに職種によってその意味づけには幅があるのだろうか、あるいはそれは全く個人的な価値の相違に過ぎないのだろうか、それとも共通した価値が語られるのだろうか。江戸行きや冬稼ぎと通年の稼ぎの区別はここでは構わずにおくことにして、まずは戦時中から終戦にかけての紡績工場をめぐる事例から見よう。

事例e：ケイコさん（昭和5年生）は兄が2人いた。ケイコさんは都会へ働きに出ずに青年学校へ3年通い裁縫や国史・地理などを習った。紡績工場についての語りの中で、いかなかったのは親が許さなかったためとしている。6年を卒業すると紡績工場へ大勢がいくので「おらああの頃うらやましくてしょうがねんだて」「いきたくて、しかし「親は出稼ぎをさせなかった」。兄2人が兵隊で出ていてテマがなく、太平洋戦争にかかって都会では食糧が不足しているからいかせなくなっただけだ」という。

この例では人手がないことに加え、食糧不足をおそれた親が出稼ぎに出さなかった。しかし、インタビューの前半では働きに出るのは余裕のない家庭のクチペランだとケイコさんは意味づけしており、自分はそれをまぬがれたとする。「自分の食べるだけをうちの品物食べないでよそいって食べるという意味なんだろ」。子供は考えが足りず「い

きたくてしょうがない」が、ケイコさんの家にはいかになくてもすむ経済的余裕があったことを示唆する。さらにこのインタビューでは、いかなかったことに対するケイコさんのある種の満足感のようなものがかすかに感じられた。

同じ昭和5年生まれでも小学校6年卒業後、13歳ぐらいから紡績工場で働いたヨウコさんは家においても供出で食べるものがないために出たのだと語る。ケイコさんとは反対にヨウコさんは「いきたくなくて、泣きながら出ていったんだから、どうでもいかなきゃならなかったんだから」。20年8月にいられなくて逃げて帰ってきたら親に怒られた。貧しい家に育ったとするヨウコさんの語り、上記のケイコさんの語りは紡績工場への出稼ぎをめぐる表裏となる例といえる。いずれも、家より食糧の多い都会で働くか、都会より食糧の多い家にいるかという太平洋戦争後半の特に厳しい当時の選択を示す例とも言える。夜中に起こされて布団の下まで米を探されたこのむらの特殊な経験は、戦後のドロブクの搜索場面同様、今でも話題になることが多い。

しかしながら、ヨウコさんは結婚する2年前（昭和30年）までは紡績工場や女中奉公へ出て過ごした。「出れば楽しかった」「「たまに帰って親にまあ小遣い少しでもやれば喜んでいた」と語る。また、昭和3年生まれのエイコさんは終戦まで家において「そうだな終戦の次の年だなあ大阪の伊丹工場（東洋紡績）へ1冬いった。まだ終戦になったばっかの頃、3月ぐらいに帰ってきた、爆弾落とされてその片隅で紡績工場だった」。理由は「出たこたねえすけで（ないの）で）いってみてえと思ったもんで」「でもいざいってみたらやだった」という。しばらく家にいた後「東京へ行ってみたいくて」親戚から仕事を見つけてもらって「女中奉公とか子守り」などをした。さらに、大正13年生まれのトミコさんは昭和16年冬から17年春まで東京の軍需工場で落下傘の修理をして過ごした。「出たことがない」からいったが、食糧事情が悪くひどい目にあった。江戸土産の砂糖を実家で用意していて配り、その年に結婚した。ケイコさんと同じ昭和5年生まれのマツコさんは高等小学校卒業後はケイコさんのように家において、青年学校で裁縫等を習った。結婚前に2度都

会へ出た。終戦の冬は兄の知り合いの紹介で浅草の御問屋へ1冬女中奉公にいき、翌冬は親に隠れて飯山職安で仕事を見つけ名古屋の電気会社で働いた。「都会へ出たかった。みんないなくて（自分のように）百姓させられたなんていなかった」と語る。

ヨウコさんの終戦後の出稼ぎやトミコさんエイコさんマツコさんの出稼ぎの例は、結婚前の猶予期間における出稼ぎ、つまり前稿で述べた観光や遊びの江戸行きと同じ文脈で読むことができよう。マツコさんのインタビューは大正5年生まれの知人の女性宅での茶飲みの際に実施したが、江戸行き経験者であるこの知人は相づちを打ちながら自分の経験を差しはさんでいた。このことからマツコさんの語りはそれ以前の江戸行き文脈で理解されうと思われる。

このように戦時中から終戦後まもない時期の語りもまた、食糧不足という厳しい状況下でのクチペラシとともに都会への憧れや楽しみとしての稼ぎを示しており、男性（アニ）の稼ぎと同様な意味の広がりをもつと考えることができる。戦時中に都会で働かなくなる男性とは対照的に女性は都会で働く意味を担い続けたのだ<sup>9</sup>。ではこうした稼ぎに女性としての特殊な価値観はありえたのであろうか。

### 工場労働と女中奉公

戦後しばらくしてみかんもぎや野沢温泉・志賀高原の旅館などでの仕事ができ、現在では多様な場所へヨメサンやカアチャンが出て働くようになった。しかし、昭和30年ぐらいまでは既婚女性が稼ぎに出ることはヒトメガワルイと言い、冬季間は家でカネトリとしてミノヅクリやカサスイなどをしたと語る話者は多い。終戦までの出稼ぎのインタビューに限れば結婚後女性が都会へ出たのは2例のみで、ほとんどは独身の女性達によって行われたとあってよい。その軌跡の幾つかをたどってみたい。

事例f：ミヨコさん（大正10年生）は「14の年、学校卒業して名古屋での募集があって近藤紡績に3年いき大阪の天満工場（東洋紡績）へもいった。その後、夏は百姓して家にいて冬は親戚の

人から紹介され野村男爵のところまで3冬ぐらい働いた。子守やまかないをした。ものがなくなってきており、お正月におせち料理の材料を買いにいったが並ばなければ買えなかった。当初は四谷のサンモンチョウ（左門町？）にいたが空襲で日本橋が焼かれたとき世田谷に移った。さらに空襲があり、うちへ来い来いといって電報が来たのでうちへ戻った。また来てちょうだいと（奉公先で）言われたが終戦になってからはいかなかった。ミヨコさんは復員した男性と結婚した。

事例g：クミコさん（大正13年生）は、「学校アガッテ最初に行ったのは名古屋のマルウリ工場（紡績工場）、13の年いって」、工場の昭和女学校で4年間勉強した。その後むらから移動班で和歌山の軍関係のミカン缶詰の工場や静岡のミカもぎへ出た。期間は11月はじまりから正月いっぱいだったので、後は自由で春までミカンの冷凍工場にいた人もいたが、「私達はもうミカン見るのがやだくなるので、女中して来らずと予約して」世田谷の白石海軍大佐の家で、海軍大佐と聞いて「どきっとしたがそれもひとつの修行だと思ってお屋敷町だからかえっていいなと思って」1冬奉公した。「ずっといてくれれば何でも教えてやる、10年いてくれれば嫁にまで出してやる、全部お嫁の支度までしてくれる、そういうことまで言ってくれて本当にいたいなあと思ったんだけど、戦時中でワカイショウ（男達）が兵隊にいてるでしょ、うちへ行って百姓の親方でやらなければならないわたしは、だからまあ切ねえ申し訳ないんだけど春になったら帰してください、苗代づくり待ってるということどうとう本当にいたかったんだけどまあしょうがない、また縁があったら来ますということだね」帰郷した。「ウチノショウはいいとこ（働き先が）見つければ困る、来なければ男の手がないんだからもう女中には出さないというわけだ（笑い）。終戦の年に伊丹工場（東洋紡績）へ冬働きに出た後はどこへもいかず、昭和23年に結婚した。

事例h：ハナコさん（大正14年生）は学校を卒業して明治製菓の工場へいき、翌年はアネのいた蕎麦屋へ代わりに出て、「今度はまたねえ、品川

のタカナン製作所へいった」何を作っていたのかわからない。次の年は兵庫の伊丹駅の紡績工場（東洋紡績）へ、それから名古屋の軍需工場へいき風船（爆弾）を作った。5回出た。うちで手があれば夏もいる人がいたが弟が幼くて百姓をしなければならなかったので冬だけ出た。うちにいても仕事がないので「楽しみでもあったよ」。

事例i：ミツコさん（昭和11年生）は「東京へそうだなあ4冬いった。うちキョウダイも多くて高校にも出してもらえなかったから、一番上だし、もう（中学を卒業して）最初の年はオハリ（裁縫）習いなさいって頼んで何人かで集まって冬はそうやって過ごしたんだ。でも友達がどんどんほら出稼ぎに出てうらやましかったから、頼んで最初に行ったのが株屋へ子守りに、その次が東京の診療所でちょっと看護婦の手伝いみたいなことを、それで准看をとろうと思ったんだけどうちで反対されて1冬終わったの、その次はお蕎麦屋さんへ、埼玉県の鳩ヶ谷というところへ2冬いってそれで終わり」「中村：そのあと結婚なされて？」「そう」。「出稼ぎ出られる頃は一番楽しかったなあ、青春時代だもん」。

このように家を助ける（スケル）クチペランや勉強や楽しみが混在する出稼ぎだが、従来の研究では紡績工場などでの通年の労働や冬稼ぎとの関係はあまり論じられていない。ところが意外にも、女性達の語りからは出る側にとっては通年／冬稼ぎの区別はそれほど重要ではなかったように見える。それを左右するのは百姓の手があるかないかという家の状況であり、ユキホリの手の有無が東京での冬稼ぎの条件だったのと好対照だ。つまりこの区別のなさに見え隠れするのは、家を取るアニと異なり、オジ同様に将来は家を離れて嫁にいくため中継ぎとしてしか生家の百姓をするのを期待されていない女性の姿ではないかと考えられる。妻（昭和3年生）の若い頃の出稼ぎのインタビューを夫（昭和2年生）がとりもって「アニがいたしイソウロでいたんさ」と冗談めかす所以である<sup>10</sup>。したがって百姓の手がなければ冬だけの稼ぎになった（事例g・h参照）。しかしイソウロでも、むらに戻って嫁にいく当時の文脈はずれてしまいそうな場合には事例iのミツコさん



のように反対されることになった。それが親のためである時にはもちろん別である。ユカリさんは（大正3年生）は、何かを身につけさせたいという親に育てられた。1、2回冬働きに出たが、キョウダイが多い家の長女として手に職をつけて「家族をちったあ安心、それが親孝行という意味で」試験を受けて看護婦となった。そのためむらの同世代の女性と異なり、結婚はかなり遅くなったが、この道を選んだ結果だと自覚している。

そこで最後に、嫁になることとの関係で仕事先はどのように意味づけられたのかを検討してみた。幾つかの例にあったように紡績工場や軍需工場での稼ぎと女中奉公は一見無造作に並んでいる印象がある。隣接する津南町では紡績・製糸工場へ出た後「花嫁修業を兼ねて東京の名家に女中奉公に出るというのもよくあるケースだった〔津南町史編集委員会1982：18〕」という<sup>11)</sup>。紡績工場の学校で花嫁修業ができたのか否かという事実はともかく、工場での稼ぎと女中奉公は女性達の語りの中ではどのような違いとして表象されるのだろうか<sup>12)</sup>。

今回は、食事の準備と片づけのいらぬ紡績工場に対して女中奉公は炊事を覚えるためタニソニックワレル修練であるとするアキさん（大正3年生）の語りを引用した〔中村1997〕。アキさんは嫁になることが決まってから夫と東京へいかせてもらった。この地方では昔の嫁はヤマで農作業をするものとされ第一に婚家の労働力としての価値が大きく、子守りや料理は姑が担当した〔駒木1997：32〕。このため働き者と評判のある娘は嫁の申し込みが多く、アキさんも紡績工場で働いた後「ちょっと山で仕事をしていたら」10軒ほど申し込みがあったと笑う。とするなら当時の嫁の条件としての炊事は二次的な意義しかもたないことになるが、嫁に行く前の女性が炊事の習得を奉公に求めた例は複数ある。またオハリも炊事と並んで奉公の理由としてあがる〔柳田1993：342参照〕。むらの既婚女性は特に冬仕事としてカネトリのミノヅクリなどの他に、ワラ仕事や針仕事をしていた。奉公以外には娘時代にオハリの上手な人の家に教えてもらいにいたり、青年学校で習ったりしたという話者もある。ここではやはり奉公に出たことのない話者の例を引こう。

事例j：サチコさん（大正13年生）はアネが幸田文の家で2冬奉公していたので、身近に奉公の体験が存在したと言っていいが自分では奉公したことはない。高等小学校をアガッテから2年間青年学校で冬を過ごした。週1回ソロバンと他の日はオハリを習った。「親は勉強はできなくもオハリはやらにゃならないと言ってたの、うちの親はオハリと言えは出してくれた」。しかし、紡績工場へはやらなかった「紡績工場へいくと工場で働いて寮にいるから、きっと茶碗も洗わずにいるでしょ、だからうちの親はそういうところへはやらなかったね」洗わないから「何も覚えることがないでしょ、うちじゃ帰ってきたって何もわからない」「こっちの言葉で言えばノメンになるって、まあズウズウシクなるって」。その後サチコさんは会社の人が来て役場で募集した明治製菓へ2冬働きにいった。明治製菓は当時軍に納入する菓子類を製造していた。女中として働くのが難しくなっていた時期だという。自分よりも年上の女性達がいっしょにいてから以前のつてを頼りに途中で明治製菓を辞めて出ていく姿を目撃している。「そりゃあ女中さんの方がいいですよ」と語る。

事例k：ヒサエさん（昭和3年生）は家が店で百姓していなかったので、戦時中から天満工場（東洋紡績）へ出た。転勤をしながら昭和25年まで東洋紡績で働いた。女中奉公の経験はない。裁縫は工場の中の学校で習い、友人と近くのお寺まで習いに通ったこともある。紡績工場と女中奉公は「違うよね、全然家庭のことはしないものね、ただ今みたいに会社へいくみたいな感じで朝起きればもうそこへ行ってきて、帰ってきて青年学校と違って教わっても食べ物みたいのは全然関係ないからね（教わらない）」「食堂行って食べて帰ってくれば火鉢しかなかったからね」「だから包丁もつということはなかったね」。ヒサエさんは嫁ぎ先で「教わるしかなかった」「だからいまだに食事作ることはいやだよ、下手だからだめなんだよね、包丁上手に使えないんだよね、小さいうちにしておこなきゃ」という。

2人とも、女中奉公へ出なかったのは時代的な

状況のためだという。サチコさんは戦争との関連を言い、ヒサエさんは「目に見えない何かが変わってきているというんじゃないかな」と語る。しかし、工場での労働と奉公の性格の違いは自分との関係ではっきりと認識しており奉公は特に炊事を習う機会と認識され、工場の仕事と対照されていることがわかる。先のアキさんとヒサエさんは14歳離れているが、このように年齢差を超えて同じ語り口に出会えるということはつまり、男性とは異なる女性達の出稼ぎのモラルや出稼ぎ観が共有されていたからなのではないかと考えられる。これらの例では花嫁修業といった漠然とした表現は使われず、具体的な奉公の理由が語られるにすぎないけれども、女中奉公はノメンにならないように嫁入り前に炊事を習う意義を含んだ出稼ぎであったのだ。

### 終わりに

本稿では冬稼ぎ自体を超えて通年の稼ぎや特定の職種までもを含め、出る・出ないに注目しながら若者の都会での稼ぎの背後に共通の文脈が存在する可能性を見てきた。そうした文脈とは家の人手の問題、経済的余裕、時代状況、アニ、女性などである。もちろんこれらすべてが江戸行きや出稼ぎという意味場に整然と収斂するようには見えていない。Straussが示唆するようにそれぞれが公的な稼ぎの習慣を各自の実践に読み込んで意味づけているとするべきであろう。しかしながら、語りを手がかりに各人の読み丁寧に接近するならば、その一部が共通性を帯びて話者達の人生に浮かび上がるのが確認できる。そして出ない者も出る者も共に生きたむらの世界がかいま見えるのである。

(1997. 11. 25 受理)

### 註

- 1) 表の転載を快く認めて下さった栄村教育委員会に感謝申し上げます。なお以下の文中に登場する話者はすべて仮名にさせていただきました。また本稿はむらを離れて働く若者の実践を幅広くとらえ関係づける意図から江戸行き・冬稼ぎ・冬働き・出稼ぎ・通年の出稼ぎ等の言葉を故意に併用しているが、必要な場合には区別してある。これにより読み手に混乱が生じるとするならばそれはすべてわたしの責任である。
- 2) 大正10年生まれの男性は昭和10年頃に母親と東京へ冬働きに出た。「凶作だもんでおふくろが子どもをオヤジにまかして出た」。当時の既婚女性の冬稼ぎはヒトメガワルイとされたが、あきらかにこの例は経済的な理由による出稼ぎである。その稼ぎの使い道についてはあきらかではないが、同世代で僅かな借金を返済できずに苦勞していた親の姿を見ていた人々は多い。昔の生活は「ミジメな」ものでとよく語られる。
- 3) タツオさんも軍隊でタニンノメンを食ったと言うことはない。タニンノメンを食うとはやはり出稼ぎの特性を示す表現と注目してよいだろう。
- 4) これまでの例で見たようにその家の経済的要因のみに帰すのにも限界がある。
- 5) 十二講を過ぎると山に入るため、雪が固まらず本当に仕事ができない数ヶ月だけ都会で働いてきた若者もいた。
- 6) この同級生達によると、父親と炭焼きをし、山仕事をし、青年学校へ通ったという。その一人は戦後間もない頃「地下足袋をはいて」東京見物へ出かけている。都会への憧れがなかったわけではない。
- 7) この頃ケイアン(紹介所)を頼った例は以前ほど多くはない。
- 8) 対照的に徴用でとられた話者は目的や選抜試験についてはっきり述べながら、こうした出稼ぎとは違うのだと語る。
- 9) 軍需工場での冬働きについては別の機会に述べたい。
- 10) 既婚の女性が働きに出なかった理由も単にヒトメガワルイからというのではなく、出稼ぎの文脈からあらためてとらえかえすことができよう。学校をアガッタ女性は家で手間がある時には労働力としては期待されない、将来生家を離れる成員であり、出稼ぎは結婚の経済的(嫁入りのための着物の用意)・実践的(家事や裁縫の習熟)準備としての性格をともなっていた。嫁になるとは婚家の労働力としてむらの日常生活に(再び)組み込まれる社会化の過程だったのであり[駒木1997:32]、出稼ぎはこの過程の前段階を構成したとすることができよう。この意味で既に婚家の手間となった女性が働きに出ることは明らかに嫁の文脈からはずれる行為となる。それが普通と違うヒトメガワルイという表現につながるのであろう。従来指摘されてきた通過儀礼としての江戸行き観は、女性の場合特に実家から婚家への再組み込みの社会化過程と関係づけることによってより広がりをもたせることができると思われる。また通年の出稼ぎともつなげることができるだろう。
- 11) 紡績工場の後で東京で奉公する習慣は十日町でも行われていた。「高等科を卒業して17歳のころでしようか、名古屋の紡績会社に勤めました。その後、

東京の佐竹さん（足尾銅山社長）のお宅で1年、菱川海軍少将のお宅で3年、お手伝いとして働きました。お屋敷では、「あそばせ言葉」を使うんでほねがおれましたたて〔十日町市企画人事課広報聴係1996：7〕。

- 12) 本稿では触れていないが、大正前半の生まれの話者の多くは、毎年東京へいく度に給金で着物を買って足したり、主人から買ってもらったりして嫁入りに備えた。江戸行きはある年代までは親が買ってくれないため自分の着物を買う稼ぎの性格をもっていたようである。男性も着物を買ったという。

#### 文献

- 駒木敦子 1997「この人間になるということ」『信濃565』pp. 30-49.  
 レヴィニストロース、C. 1979「労働の表象」大橋（編）『構造・神話・労働』みすず書房 pp.85-94.  
 前山隆 1981『非相続者の精神史』御茶の水書房  
 宮本常一 1984『家郷の訓』岩波文庫  
 中村博一 1997「出稼ぎ？勉強？観光？江戸行きをめ

ぐる語りの世界（その1）」『長野大学紀要』第19巻2・3号合併号 pp.45-55

柴村1964『柴村史 界編』柴村

Schildkrout, E. 1979 "Women's Work and Children's Work : Variations among Moslems in Kano." In Wallman, S. (ed) *Social Anthropology of Work*. Academic Press. pp.69-85.

Strauss, C. 1992 "Models and Motives." In D'Andrade, R. & Strauss, C. (eds) *Human Motives and Cultural Models*. Cambridge U. P., pp. 1-20.

Thompson, E. P. 1991 *Customs in Common*. The Merlin Press.

十日町市企画人事課広報聴係（編）1996『市報 とおかまち 473』十日町市役所

津南町史編集委員会（編）1982『津南町史編集資料 第8集』津南町史編集室

柳田國男 1993『明治大正史世相編』講談社学術文庫